

卵の思い出

小山 幸子

小さいころに住んでいた家には、比較的広い庭があった。庭には、祖母の趣味で、実のなる木々がたくさん植えられていた。梅、渋柿、甘柿、栗、ざくろ、ゆすら梅、そしてグミの木などがそれぞれ何本も、所狭しと植えられていた。私にとっての四季は、これらの木々に葉がでて花が咲き、やがて葉が色づき、実がつき、そして葉が落ちて家中で落ち葉掃きをするというような、庭の木々の変化を中心としてイメージづけられていた。栗拾いの楽しさも、

柿取りの楽しさも、ぐみの木から実をつまみ取って食べる楽しさも、四季の変化とともに脳裏に染み込んでいる。渋柿を干し柿にしたり、焼酎につけたりする祖母の手元をじっと見守っていた小さいころの自分を、今も昨日のことのように思い出す。祖母は、それらの作業のひとつひとつを、ゆっくりと確信に満ちた手つきで進めていたものだった。

所狭しと植えられていた実のなる木々は、私にとってにはジャングルでもあった。植え込みの奥へと

分け入って行き、塀の隙に植えられていたぐみの木の所に行くと、子ども心には家からずいぶん離れた所に来た気になったものだ。小さいころには距離感がずいぶん違っていたのだろう。冒険気分でぐみの木まで行き、実をつまみ食いするのは、ちょっととした楽しみだった。

この庭の中に、非常に古くて壁板もすっかり黒ずんでしまった鶏小屋があった。かつて祖母は、戦時中の食料の足しにとニワトリを飼っていたらしくかった。けれども、私の小さいころにはすでにまったく使われなくなって、空っぽのまま放置されていたのだ。この鶏小屋に、小学校のころ、祖母に頼んでニワトリを飼わせてもらったことがある。小学校二年のころだと思う。私にとっては、生まれてはじめての飼育経験だった。そして、今にして思えば、これは今も続いている動物とのつきあいの原点とも言える経験となっている気がする。

祖母は、十六羽のニワトリを、私のために買って

くれた。ペットにしては多い数だ。だから、私にとっても、この時のニワトリにはペットという感覚はなかった。ニワトリを飼育をし、時には卵を取りに行く。そして、最終的には食べる、という経験をしたのである。

このニワトリたちの世話をするのは、とても楽しいことだった。ニワトリの餌は、何とも言えない良い匂いがしていて、その匂いを嗅ぐだけでもとても楽しかったし、中に混ぜ込む菜っぱを庭先において古びた木のまな板の上できざむのは、幼稚園のころのままごと遊びのような感じで楽しかった。半円形の金属の板が先に直角についた棒を使って糞をかき寄せて糞掃除をするのさえ、糞がたくさんたまっていればいるほど大漁気分で心地良かった。けれども、何よりも私が好きだったのは、卵を取りに小屋の中に入っていく仕事だった。

鶏小屋の裏には扉があり、それを開けると、奥の方にはニワトリ用の産室があった。卵を取りに行く

のには、この鶏小屋の裏の扉を開けて中に入り、いちばん奥の産室のところまでそっと入って行かなければならなかった。鶏小屋の中は暗くて、ニワトリの匂いでいっぱいだった。裏の扉を開けると、餌の匂いとニワトリの匂いの混じり合った独特の強烈な匂いがワッと小屋から飛び出してくる感じがしたものだ。この匂いを、私はとても好きだった。胸一杯にその匂いを吸い込むようにして、わくわくしながらもそっとはいつて行ったものだ。そして、いちばん奥の産室のところまで行くと、よくそこでニワトリが卵を抱いて座り込んでいた。しゃがみ込んで座っているニワトリを驚かさないように、そっと産室の扉を開け、ニワトリのおなかの下にゆっくりと手を入れていく。そうすると、そこにはニワトリの体温でほかほか暖められた卵があった。この時の気持ち、嬉しさ以外の何物でもない。あったー!!と、心の中で叫ぶと同時に、喜びが沸き上がってくる。一人で、ほくほくと顔をほころばせてしまう。

卵をそっと握りしめ、親鳥を驚かさないようにゆくりとおなかの下から卵を取り出す。そして、両手で卵を包み込むように持つと、卵があった嬉しさも手伝って、体中に卵の暖かさが広がり、自分がその暖かさに包まれていくような感じがしたものだ。卵は、本当はとても暖かいものだ。

何か特別のことがあると、このニワトリは我が家のご馳走として料理もされた。そんな時の祖母は、これぞというニワトリを選ぶと、ニワトリの頸を持ち、急所を軽くひねるだけで瞬時にニワトリを安楽死させた。頸椎をはずすこの処置は、指をごく僅かに動かすだけで済んでしまうものなので、横で見ても何をしたのかまったく目にもつかないほどだ。しかも、頸を持った瞬間に



はずでニワトリはぐったりとしているほどに素早く、その速さにも目を見張ったものだ。そしてその後、柿の干し方、等を教えてくれたのと同じように、ニワトリの処理の仕方や裁き方を祖母はゆっくりと説明しながら見せてくれた。

小さいころの思い出は、思いだし始めると、その時その時の驚きや喜びの感情といっしょに、後から後から湧き出るように浮かび上がってくる。記憶に残るその時々のできごとは、それぞれ皆、数分間のできごとなら。それが今も鮮烈に脳裏に焼き付いているのを考えると、小さいころの体験の影響の大きさをととても感じる。ほとんど、心理学や行動学の用語にもなっている「刷り込み」の現象のように、瞬時に刷り込まれてしまったような感じすらある。

一般的には、刷り込みの現象は、離巢性の動物（鳥類や哺乳動物で、誕生時からすでに比較的运动能力が備わっている類の動物を指す）において、誕生後早期に身の回りにいる動くものを追従対象とし

て記憶する現象を指して言う。ただし、このような追従対象の学習現象においても、その後の研究では、さほど誕生後瞬時に学習されるのではなく、誕生後十三時間から十六時間ころに最も学習が進むことがわかってきている。半日以上も経ってからの方が学習が進みやすいのだ。学習には、学習に最適な時期が存在していることを、これは意味している。

また、この現象は、学習することが遺伝的に組み込まれていることを示している。「遺伝的な学習」というのはとても奇妙な現象だ。

離巢性の動物で、比較的短時間におこなわれる学習現象として発見されたために、いかにも速やかな語感のある「刷り込み」という名前がこの学習現象には付けられたわけだが、就巢性（誕生時には非常に未熟な状態で、親による全般的な保護管理が必要な類の動物を指す）の動物においてもこの現象は存在していると考えられる。現象の進展が離巢性の動物に比べてゆっくりだという違いがあるだけなので

はないかと思う。誕生時の状態が未熟な分だけ学習に適した状態に至るまでに時間がかかるのではないだろうか。誕生してから何週間、あるいは何か月後に比べて、ようやく追従対象を学習するのが就巢性の動物と言えるだろう。恐らく、刷り込みの現象に限らず、離巢性の動物にしても、就巢性の動物にしても、ある物事を学習すること自体には時間はかからず、学習に適した状態になるまでの時間に現象による違いがあるのではないだろうか。

小さいころのニワトリの飼育、等のことを思い出していて思うのは、同じ家で育っていても兄にはまったくそのような思い出や感慨がない（だろう）ということだ。共通の環境に存在していても、何に感動し、何によってほとんど一生に渡るような影響を受けるかはまったく違っている。これは、まわりにあるたくさんの刺激の中で、影響を受ける刺激を自ら選択していることを意味している。つまり、自分では影響を受けたとっていて、確かに経験した

ことの影響はあるには違いないが、それは自ら影響を受けようと待ちかまえていてつかみ取ったような影響なのだと言って良いだろう。「影響を受ける」ということはに内在する受動的な態勢よりもはるかに積極的な態勢がそこには含まれていると考えられる。恐らく、どのような環境の中に入っても類似した刺激に反応して、似たような影響を必ずや受けていたに違いない、と思う。そして、恐らく、それぞれの環境によって生ずる違いは、その刺激を提供した人物が、その刺激を提供しながら付加した言語的指示や行動、態度などの周辺の側面なのではないかと思う。例えば、祖母が庭の木々やニワトリに対して何らかの作業をすれば、刺激としてそれを感受しようとする態勢が私にはあったのだろう。そして、様々な動作を祖母が私に示しながら話した言葉やその言葉の中に含まれる物の考え方は、動作自体が持っている刺激に付加されていっしょに学習されていると思う。類似した刺激が示されて、しかも、

違った付加刺激が加わっていれば、私の中には同じ刺激動作に対する違った考え方の体系が構築されることになる。つまり、どんな環境にあっても類似した刺激に反応して影響を受けたことと思われるが、それに付加されている付加刺激によってまったく違った考え方の体系が作られることは十分に可能なのだ。共通の環境にいても、どのような基本的刺激にそもそも反応するかには生得的な要因が関与し、感受した基本的刺激に付加されている細かい付加的刺激は、その基本的刺激を具体化させ、体系化させると考えることができるのではないだろうか。

こうして考えると、このような遺伝的な学習、すなわち何を学習するかが遺伝的に組み込まれているような学習とそれに付加されて学習されるものの関係は、以前に紹介した鳥のさえずりの学習のメカニズム（十一月号）にも類似した側面を持っていると思う。さえずり学習の型板仮説によれば、何を学習するかが遺伝的に決定されていて、学習にとまっ

てその地域の方言が学習されるといふ。そして、この方言を学習しておくことがいがい形成に重要な役割を果たすと言われている。人間の場合の諸々の体験学習にこれを当てはめれば、人間の場合には様々な現象を「学習するべくして学習し」、それに伴って付加的に学習された中に含まれている考え方の体系は、あるいはその人の一生に渡ってその現象に関連したものの考え方として染み込んでしまうのかもしれない。後年、様々な人との出会いの中で感じることの多い考え方の類似や相違は、年少時にどのような付加的刺激を供給されたかによって構築された考え方の体系が人によって似ていたり違っているのを感じる現象ということになるのだろうか。もしそうだとすると、周知のように、それが仲間関係の形成や結婚相手の選択にも関係していることは、鳥の場合の方言学習の果たす役割と非常によく似ている、と思う。

小さかったころの庭の木々にまつわる思い出やニ

ワトリにまつわる思い出は、たしかに心の奥底のどこかに自分の自然観の土台とも言えるものとして今も残っているように思う。そして、ニワトリの飼育は、人と動物とのかかわりのひとつの側面を実体験したとても貴重なものだったと思う。普通ならば避けたり見せないようにするような作業まで見せてくれた祖母の姿勢には、現代ではあまり触れることのできないような動物とのかかわり方の一面を伝えようという意図が、もしかするとあったのかもしれない。

数年前まで何年間か、都内のある女子大学で動物の実験実習を頼まれたことがあった。毎年何十人かの女子学生に接して知ったのは、あまり動物を飼ったことのある人がいないことだった。最近、住宅事情の問題も動物を飼育したことのない人が増加させるのに一役買っているので、仕方がないと言えれば仕方がないことかもしれない。実験計画を立てて、動物を観察し、実験をするだけでなく、この実習で

は動物（ネズミが多い）の飼育も当然担当してもらった。また、実習の間には、たいてい一度はネズミの出産を目にすることが多かった。そして、最後には最終処置をしなければならぬ。この一連の過程は、その意味では、単に実験をするだけに留まらず、動物の命を、その始まりから終わりまで預かる過程だとも言える。この実習を通して、彼女たちの反応を見てみると、観察や実験のおもしろさ以外に、生命の誕生や死、そして生命を維持することに伴う責任の重さがかなり大きな体験となっているのを感じる。大学に通う年代に至っていると、個々の体験にどれだけの影響力があるかはわからないが、それぞれの場面に際して実習を指導する立



場から与える言語的教示や行動、態度がもしかする
と瞬時にその人の一生にも残るものとなるかもしれ
ないと考えたと責任の重さを感じる。そして、この
ような教育の現場をわずか数年間ではあっても経験
した中で思ったのは、まず、すべての人に等しい影
響を与えることは不可能だろうということだ。どの
人にも、何を得ようとするかという遺伝的な学習傾
向があれば、どの人にも同じものを提供しても感受
しようとするかどうかには差がある。ならば、可能
な限り多様な刺激を提示して、各人が感受したと見
られるものにそれぞれその都度なるべく適切な言語
的教示を付加するのが理想的な教育となるのだろうか
か（この雑誌に私がそのようなことを書くのはとて
もおおがましいのだが。門外漢の虚言と読み流して
頂きたい）。この場合になるべく適切な言語的教示
とはいったいどのような教示なのだろうと思う。各
人の関心がさらに高まり、具体化するようなアドバ
イスという中性的なものに終始するべきか、あるいは

はそこにさらに個人の考え方も盛り込んだような
ものにまでしても良いのか。対象年齢が低ければ低
いほど個人の考え方も含めた教示は影響が大きい
だろう。大学までに至れば、どこからが個人的な考
え方なのかを明示して討論をすることもできるだろ
う。否、もっと早い年齢からもそれは可能なように
も思う。そして、そのような討論の経験を持つこと
が、人によって考え方が異なることを知る機会に
なり、様々な考え方の中で自分の考え方をいかに位
置づけるかを考える機会にもなると思う。と、ここ
まで考えると、これはとても大変なことなのではな
いか、教育とは何て難しいことなのだろう、と思っ
てしまうのだ。

（聖徳大学短期大学部）